

医療施設における転倒・転落事故とその対策 —転倒・転落に対する物的環境の構築—

須田 眞史 国立保健医療科学院 施設科学部

■人的努力による対策には限界がある

急性期医療施設において、入院患者の転倒・転落事故は少なくない。このような現状に対して医療現場では、「ナースコール指導」と「頻回に訪室する」と「見守りを強化する」が主たる転倒・転落対策となっていないだろうか。例えば、患者にナースコールにて看護師へ介助依頼をするよう指導していたにも関わらず一人で動いてしまい、そのことが転倒につながるケースが少なくない。看護師はこのような患者に対し転倒の再発を防ぐため、改めて「ナースコールを押すよう指導する」ことがある。しかしながら、ナースコールは患者に依存するものであるため、そもそも対策とは言えない。さらに認知・理解力に問題がある患者においては、ナースコール自体を期待することができない。また、転倒・転落はいつ誰にでも起こる可能性があり予測不可能な側面がある中で、多忙な業務を抱える看護師が「頻回に訪室する」、「見守りを強化する」ことにはそもそも無理がある。したがって、このような看護師の人的努力に頼る対策には限界がある。

■発想の転換—人的対策から物的対策へ—

そのため、より効果的な対策をたてるためには、人的努力以外の側面から転倒・転落への防止対策を検討する必要があると考える。そこで、療養具などの諸物品や建築のしつらえといった物理的な環境条件を整備することで検討する対策を「物的対策」と呼ぶこととし、物的対策によりある程度の転倒・転落事故を防止することができるのではないかと仮説を立てた。この仮説のもと、都内5つの急性期病院、のべ21病棟を対象に実施した入院患者の転倒・転落の実態把握調査により収集した164件について、転倒・転落と物的環境との関係の分析を行った。

■患者の状態に応じた対策を

転倒・転落への物的対策を効果的に施すためには、患者の状態別に対策を検討する必要があると考えられる。そこで、認知・理解力の問題、動作能力、臨床経過に多大な影響を与える治療用具の装着の有無といった患者属性に着目し、転倒・転落が予想される患者のタイプ分類を行うツールを検討し、それをもとに転倒・転落への物的対策を具体的に検討した。様々な場面での転倒・転落があるが、ここでは「ベッドからの転落」、「ベッドまわりでの転倒」、「トイレでの転倒」、「廊下歩行中の転倒」の4種類について検討を行った。これら取り組みは、平成15・16年度厚生科学研究「医療施設における療養環境の安全性に関する研究（主任研究者：三宅祥三・武蔵野赤十字病院長）」として実施したものである。本講演では、その研究成果より転倒・転落への物的対策を紹介する。